

平成26年度

# 富山市民 感謝と誓いのつどい

とき 平成26年8月1日(金) 午後1時30分  
ところ 富山国際会議場 メインホール

中学生作文最優秀賞

## 「期待できる明日」

富山市立城山中学校三年生 浦山 こはる

私が、小学三年生のころ八月二日の花火大会に家族で行ったことがある。その時、母に富山大空襲の鎮魂のためだと教えてもらった。そして、父から聞いた事が今でも心に残っている。父の祖母が話していた事らしい。

「おばあちゃんが夜中、空襲警報が鳴り走って山の中に逃げると富山市の全体が見渡せたらしい。そこには、たくさんあった建物のかげが全くなく、真っ赤に燃える炎しかなかった。」と聞いた。この川にもたくさんの方が炎から逃げてきたのだとも教えてもらった。それまで戦争という名前しか知らなかった私は、突然怖くなり、両親の手を握りしめたことを覚えている。私はその話を聞いてから、約七年の時が過ぎた。今でも話を聞いた時の感情は変わらない。

『真っ赤に燃えるまち』からいくつもの時が過ぎた。今では「緑があふれるまち」として私も豊かな自然に囲まれて生活する事が出来ている。これには、先人の方たちの測り知れない努力のたまものだと思う。全ての希望がなくなつたあの日から、明日への希望が見えるようになり、また期待もできるようになった。来年には新幹線が富山にやって来る。

豊かな自然に囲まれ一歩ずつ前進していく富山県に生まれたことを、私はほこりに思う。すばらしく発展し続ける私たちのまちは、これからも多くの希望を叶え、更に幸せなまちになるだろうと私は思う。

割と大きな道の歩道は古くからある道ではガタガタになっている道が多いのではないかと思う。高齢化の進む日本で車イスで過ごすお年寄りの方も多い。また、点字ブロックも古くなり段差などができているところもあり、障害者の方に危ないのではないかと思う。

小さいなことも更によいまちにするためには小さなことから一歩前進が大切だと思う。私の曾祖母も車イスに乗り、デイスの車と行き来していたが道の悪い所があり、とても大変そうであった。どんな世代のどんな方でも住みやすいよりよいまちになるためにぜひ直していただきたい。

新幹線が富山にやって来ることで、更に富山の魅力に気付く人が増えるだろう。美しい立山に見守られすこやかに生活できるこのよさかみしめ、すばらしい先人の方々の後をついでいけるような大人になりたいと私は思う。

小学生絵画最優秀賞

三・四年生の部



「生き物となかよしのまち」

富山市立上条小学校3年 先達 龍馬 さんの作品

五・六年生の部



「笑顔あふれる富山市」

富山市立杉原小学校5年 北田 江里 さんの作品

### 富山市のあゆみ展

#### 日時・場所

7月30日(水) 午前10時～午後6時

7月31日(木) 午前9時～午後6時

8月1日(金) 午前9時～午後4時

富山国際会議場 1F交流ギャラリー

#### 内容

富山市の歴史の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く絵画「未来の富山市」も展示します。

主催/富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

富山市自治振興連絡協議会  
富山市老人クラブ連合会  
富山市婦人会  
富山市小学校長会

富山市社会福祉協議会  
富山市民生委員児童委員協議会  
富山市母親クラブ連絡協議会  
富山市中学校長会

富山市遺族会  
富山市児童クラブ連絡協議会  
富山市PTA連絡協議会



## 生きる源「水」

富山市中島 新田 光子

私は、忘れることができない。あのすさまじい富山大空襲の日のことを…。

その日、私は、病弱な母と弟(当時五歳)の疎開先、富山市蛭川へ二人の様子を見に訪れた。そして、久し振りに母と話し合い、元気な姿にほっとした思いであった。

しかし、悲劇はその夜襲ってきた。当時は、夜になれば、灯火管制下、防空頭巾を手もとに置き、毎夜不安な夜を過ごしていた。

八時ごろだっただろうか。かすかな飛行機の爆音が聞こえてきたような気がした。突然、「空襲警報、空襲警報」の悲鳴にも似た叫び声が連呼され続けられた。取りあえず、頭巾をかぶり、食料、薬品の入ったリュックを背負い、三人でどうなることかと、震えおののいていた。

はるか神通大橋の漆黒の闇の中、サーチライトに映し出されたB29の編隊が幾つも見えた。その機影から、ごまつぶのようなものが舞い落ちるのを見た。(後で聞いたところによると、焼夷弾とのこと) そのうち、安野屋の方から、パツと火の手が上がり、次々と真つ暗な空に、花火のように噴き上がった。噴き上がっては消え、また噴き上がり、次第に富山の中心部へ向かって移っていった。

当時、母たちが、空襲に備えて、連日防火訓練をしていたので、「きつと、皆さんで火を消しておられたのね。防火訓練のお陰ね」と、今にして思えば愚かな気持ちを抱いていた。防空壕の中に入ったり、外の様子を見たり、三人で逃げ惑い、不安の中に夜が明け、疎開先が焼け残ったのでほっとしていたものだった。

ともかく、「無事なことを、岩瀬の父や家族に知らせなくちゃ」と、朝食は岩瀬でとることにして出かけることにした。

南富山で市電に乗り、富山駅で岩瀬行き電車に乗ればいいと安易な気持ちだった。疎開先を出て五、六分ごろから、すごい臭気におそわれ、疲れ果てたような多くの人とすれ違った。何ということだろうか。私の学校(堀川町の富山師範学校。今のいずみ高校)も焼け野原、あちこちから、くすぶりの煙りが立ちのぼり、地獄図を見ているようだった。もちろん市電など通っているはずもない。

市電の線路沿いに歩けば、何とか行き着くだろうと歩き始めた。ところが、全くの瓦礫の山、焼けた、だれた家の残骸、焼け焦げた死体。怖くて怖くて、どう歩いたのか記憶にない。やっと見えたのが、真つ黒の大和。辺り二面の焼け野原にぽつんと立っている。遠くに電気ビルだけが見えている。もうすぐ富山駅だ。元氣を取り戻して歩き続けた。富山駅は、そばへも近付けない。ホームの電車も真つ黒焦げ。電車も通っているはずもない。岩瀬へ向けて、とぼとぼとまた歩き始めた。道のあちこちに横たわっている死骸を見つめながら、ただひたすら歩くだけだった。

日本の国はどうなるのだろう。私たちはどうなるのだろう。今まで、他の所の被害は聞いてはいたが、今自分の目の前のすごさに、目の前が真つ暗になり、とうとうへたりこんでしまった。ガラガラ太陽に照らされ、朝から何も食はず、瓦礫と死骸の山の中を、涙さえ枯れ果ててしまっていた。

かがみこんだ所に、何と、こんこんと水がわき出ている。びっくりするより、思わず手にすくって餓鬼のようにむさぼり飲んだ。体の中に清らかな水がしみこみ、「ああ、生きていてよかった!がんばらなくっちゃ!命を大切にしよう。早く帰って、みんなが無事だということ、父に知らせなくちゃ」。私は元氣を取り戻し、ひたすら岩瀬へ向けて歩いた。

生命の大切さを教えてくれたあの日の水。あの澄みきった清らかな水。それは、富岩街道の中島駅のそばの掘抜き井戸だった。今はもうない。しかし、私の心の中にずっと生き続けている。

戦後五十年。生きる勇気をずっと与え続けてくれた水。いつも感謝の気持ちを忘れずに、大切にに使わせてもらっている。



氷見市島尾海岸に漂着した富山空襲の犠牲者を供養するため、現地に建立された慰霊像

# 式典

## 1. 富山市の紹介映像

## 2. 「<sup>とわ</sup>永久の火」入場 奉持者 富山市立城山中学校生徒

## 3. 国歌斉唱

## 4. 黙とう

## 5. あいさつ 富山市長 森 雅志

## 6. 朗読 「私の戦争体験記」から『生きる源「水」』/新田 光子 朗読/声のライブラリー友の会 広長 直美

## 7. 代表献花及び一般献花

## 8. 「永久の火」昇天